＜現場報告＞

子ども虐待に関する母親の意識調査

三　徳　和　子[1)]，伊　藤　亜　古[2)]，森　　隆　也[3)]
木　村　　愛[4)]，鷲　見　芳　江[5)]，大　西　美　紀[6)]

An attitude survey of mothers on child abuse

Kazuko MITOKU, Ako ITOU, Takaya MORI, Ai KIMURA, Yoshie SUMI, Miki OONISHI

はじめに

近年，児童虐待はまれな現象でなく誰にでも起りうる問題として捉えられる．識者によりその要因について「少子化」「核家族化」「地域コミュニティの弱体化」など多くの解釈がなされこれまでの調査でも，保健所は児童虐待（特にネグレクト）の発見と在宅援助にとって重要な機関であることが明らかにされている[1～4]．しかし，当保健所管内の虐待に関する情報は十分につかめていない．そこで乳幼児虐待発生予防対応を推進するため，虐待および育児不安に関する実態の把握を目的として調査を行ったので報告する．

1　対象および方法

対象は管内市町村（各務原市，高富町，伊自良村および美山町）で3歳児をもつ母親に，出生数を勘案して各務原市は11年7～8月に3歳児に達する者とし，郡部3町村は3歳児健診対象者全員とした．調査時期は平成11年8月で，方法は郵送法により，自記式・無記名で回収した．

虐待傾向判定は，母親の子どもに対する虐待行為（有害な育児行動）の認定について女性問題研究会が平成6年9月に実施した一般家庭調査[5)]の質問項目とほぼ同じ内容によった．虐待行為の評価項目の質問は表1に示す．虐待評価は各

表1　虐待項目を判断するための質問項目

1	泣いても放っておくことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
2	食事を与えないことがある。	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
3	風呂に入れたり、下着を替えたりしないことがある。	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
4	大声でしかることがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
5	お尻を叩くことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
6	手を叩くことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
7	頭を叩くことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
8	顔をたたくことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
9	つねることがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
10	物を使って叩くことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
11	物を投げつけることがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
12	髪を切ることがある（整髪ではなく）	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
13	押入などに入れることがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
14	家の外（ベランダなど）に出すことがる	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
15	子どもを家においたまま出かけることがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
16	裸のまま（夏の暑いとき以外に）にしておくことがあ	1	全くない	2	まれにある	3	よくある
17	自動車の中に子どもだけでおくことがある	1	全くない	2	まれにある	3	よくある

1）旧：岐阜県恵那保健所　新：川崎医療福祉大学
2）岐阜県西濃地域保健所
3）岐阜県各務原市役所
4）岐阜県高富町役場
5）岐阜県伊自良村老人福祉センター
6）岐阜県美山町役場

［平成14年1月29日受理］

項目を「まったくない」を1点，「まれにある」を2点，「よくある」を3点とし，17項目について総和を求め，17～23点を「虐待なし」，24～27点を「虐待傾向」，28点以上を「虐待あり」と分類した．

解析はSPSSを用い，順序尺度の比較にはKruskal-Wallis検定を行った．

2．結果

1）回収状況

回収状況は対象者507人のうち442人から回答があった（回収率87.2%）．解析は17の項目の回答に不備のある42人を除き，400人を対象とした（表2）．

2）虐待傾向の概要

項目スコアから「虐待あり」と判定された母親は12.5％，「虐待傾向」と判定された母親は39.5%であった．市部と郡部ではそれらの割合に差はなかった．年齢別では40歳以上の母親に，「虐待傾向」および「虐待あり」が多い傾向であったが有意ではなかった（表3）．

住居状況別（持ち家か借家か，一戸建てか集合住宅か，祖父母が近在か遠方か），家族構成別（核家族か，祖父母と同居か，4世代以上か，祖父母が近在か遠方か）による差はなかった．

婚姻状況では配偶者と同居の通常婚姻でも半数以上が「虐待傾向」「虐待あり」に属し，同居状況の有無による違いは見られなかった．離別では「虐待あり」が33.3％（6人中2人），未婚出産2例は「虐待傾向」「虐待あり」であったが統計的には特に有意に高い訳でなかった．

母親の就業・専業別状況による傾向に差はなかった．

3）出産時の状況

望んだ妊娠でない者に有意に虐待の傾向が高かった（$p < 0.05$）．妊娠中の管理が不十分だったとした母親は「虐待あり」30.8％と高く，出産直後に保育器収容された者は「虐待傾向」「虐待あり」がやや高かったが，いずれも有意ではなかった（表4）．

4）育児不安

「とても不安」の者は「虐待傾向」「虐待あり」が68.9％であった．育児不安が増すにつれて虐待の傾向が有意に高かった（$p < 0.001$）（表5）．

5）母性意識

子育てについての意識では，「生きがいを感じる」「充実感を感じる」「母親であることが好き」「自分らしいと思う」「気持ちが安定した」「負担を感じない」「自分は母親に適格」「子どもを産まない方がよかった」の項目で，母親であることに否定的であるほど有意に「虐待傾向」「虐待あり」が高かかった．「子育てを負担に感じる」とした者は「虐待傾向」「虐待あり」が11人中6人（54.6％）で有意に高かった．その他の4項目では有意な差はみられなかった（表6）．

6）母親自身の性格

「子どもを強く叱る時の自分を別人のように感じる」ことが「よくある」または「まれにある」と答えた者は400人中142人（35.5％）であり，「よくある」と回答した者は「虐

表2　市郡別虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
市郡名	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
計	400	192	48.0	158	39.5	50	12.5	
各務原市	212	104	49.1	81	38.2	27	12.7	p=0.75
山県郡	188	88	46.8	77	41.0	23	12.2	

表3　母親の年齢別虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
母親の年齢	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
計	400	192	48.0	158	39.5	50	12.5	
２４歳以下	11	4	36.4	5	45.5	2	18.2	
２５～２９歳	86	39	45.3	35	40.7	12	14.0	
３０～３４歳	209	106	50.7	86	41.1	17	8.1	p=0.068
３５～３９歳	77	38	49.4	25	32.5	14	18.2	
４０歳以上	13	3	23.1	5	38.5	5	38.5	
有効回答数	396	―	―	―	―	―	―	

表４　妊娠状況・妊娠管理状況・保育器収容別虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
計画的妊娠である	142	72	50.7	52	36.6	18	12.7	
いいえ	236	106	44.9	102	43.2	28	11.9	p=0.40
有効回答数	378	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
望んだ妊娠である	309	151	48.9	129	41.7	29	9.4	
いいえ	69	27	39.1	25	36.2	17	24.6	p＜0.05
有効回答数	378	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
妊娠中の管理が不十分だった	13	4	30.8	5	38.5	4	30.8	
いいえ	365	174	47.7	149	40.8	42	11.5	p=0.09
有効回答数	378	ー	ー	ー	ー	ー	ー	
出産直後に保育器に収容された	35	13	37.1	16	45.7	6	17.1	
いいえ	343	165	48.1	138	40.2	40	11.7	p=0.18
有効回答数	378	ー	ー	ー	ー	ー	ー	

表５　育児不安別虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
不安はない	183	101	55.2	69	37.7	13	7.1	
やや不安	177	76	42.9	74	41.8	27	15.3	p<=0.001
とても不安	29	9	31.0	13	44.8	7	24.1	
有効回答数	389	-	-	-	-	-	-	

待あり」41.7％と高率で，「感じる」頻度が高くなるほど「虐待傾向」「虐待あり」は有意に高かった（p＜0.0001）．（表7）．

7）「子どもが望み通りにならない,気の合わない子どもがいる」と感じている者程，「虐待傾向」が高く，「望み通りにならない」とよく感じる者は「虐待傾向」「虐待あり」が合わせて69.6％であり，有意に高かった（p＜0.0001）．気の合わない子どもがいる母親は，いない母親に比べ「虐待傾向」48.3％，「虐待あり」24.1％と高かった．気の合わない子どもがいるは29人で，第一子が23人であり，うち17人が「虐待傾向」「虐待あり」で，有意に高かった（p＜0.05）（表8）．

8）夫の特性

「夫による子どもへの粗暴な扱い」がよくある7人，まれにある58人，合計65人中，母親の「虐待傾向」36人「虐待あり」15人で合計51人（12.7％）と多く，夫が子どもを粗暴に扱う傾向にあるほど母親の虐待の傾向も有意に高かった（p<0.001）．

また，母親の7割が夫に家事や育児をもっと協力して欲しいとし，その気持ちが強い程，有意に虐待の傾向が高かった（p＜0.05）（表9）．

3　考　察

今回の調査は主に身体的・精神的なネグレクトの実態の把握を目的とした．結果の解析が出来た400人中「虐待傾向」「虐待あり」52.0％で，うち「虐待あり」12.5％，「虐待傾向」39.5％であった．首都圏一般人口における児童虐待調査[5]では「虐待あり」8.9%，「虐待傾向」30.4%であり，いづれも首都圏調査よりも高い．これは本調査の対象を3歳児を持つ母親と限ったことで，前述の調査よりも子どもの年齢が小さい，つまり母親が若く，育児経験が少ないこと等が影響していると考えられる．また，都会は多くの育児サービスがあり，いざとなれば利用できるが，地方では利用できるサービスが少ない等の違いが関連しているのかもしれない．今後育児支援サービスの種類・量・質と育児不安の関連について明らかにしていくことも必要であろう．

夫との関係では夫と同居か否かに関係なく「虐待傾向」「虐待あり」が半数以上であった．また，夫の家事・育児協

表6　母性意識状況別虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
母親であることに生きがいを感じる	132	80	60.6	47	35.6	5	3.8	
どちらかと言えば感じる	170	72	42.4	75	44.1	23	13.5	
どちらかと言えば感じない	74	25	33.8	34	45.9	15	20.3	p<0.001
感じない	16	10	62.5	2	12.5	4	25.0	
有効回答数	392							
母親であることに充実感を感じる	128	80	62.5	40	31.3	8	6.3	
どちらかと言えば感じる	180	72	40.0	86	47.8	22	12.2	
どちらかと言えば感じない	67	25	37.3	29	43.3	13	19.4	p<0.001
感じない	16	9	56.3	3	18.8	4	25.0	
有効回答数	391							
母親であることが好き	180	102	56.7	67	37.2	11	6.1	
どちらかと言えば好き	178	72	40.4	78	43.8	28	15.7	
どちらかと言えば嫌い	28	10	35.7	13	46.4	5	17.9	p<0.05
嫌い	6	3	50.0	0	0.0	3	50.0	
有効回答数	392							
母親であるときが一番自分らしいと思う	63	30	47.6	26	41.3	7	11.1	
どちらかと言えばそう思う	209	110	52.6	83	39.7	16	7.7	
どちらかと言えば思わない	89	32	36.0	41	46.1	16	18.0	p<0.05
思わない	28	13	46.4	7	25.0	8	28.6	
有効回答数	389							
母親になり気持ちが安定したと思う	89	52	58.4	30	33.7	7	7.9	
どちらかと言えばそう思う	196	90	45.9	86	43.9	20	10.2	
どちらかと言えば思わない	79	30	38.0	36	45.6	13	16.5	p<0.05
思わない	26	15	57.7	5	19.2	6	23.1	
有効回答数	390							
母親になり人間的に成長できたと思う	198	99	50.0	81	40.9	18	9.1	
どちらかと言えばそう思う	156	71	45.5	63	40.4	22	14.1	
どちらかと言えば思わない	27	10	37.0	12	44.4	5	18.5	p=0.31
思わない	8	5	62.5	2	25.0	1	12.5	
有効回答数	389							
子育てを負担に感じない	123	71	57.7	43	35.0	9	7.3	
どちらかと言えば感じない	136	70	51.5	56	41.2	10	7.4	
どちらかと言えば感じる	120	39	32.5	57	47.5	24	20.0	p<0.0001
感じる	11	5	45.5	2	18.2	4	36.4	
有効回答数	390							
母親として不適格だとは思わない	76	53	69.7	16	21.1	7	9.2	
どちらかと言えば思わない	166	80	48.2	78	47.0	8	4.8	
どちらかと言えば思う	129	51	39.5	52	40.3	26	20.2	p<0.0001
思う	21	3	14.3	9	42.9	9	42.9	
有効回答数	392							
子どもを産まない方が良かったとは思わない	339	172	50.7	131	38.6	36	10.6	
どちらかと言えば思わない	43	13	30.2	23	53.5	7	16.3	
どちらかと言えば思う	14	4	28.6	4	28.6	6	42.9	p<0.05
思う	3	2	66.7	0	0.0	1	33.3	
有効回答数	399							
行動がかなり制限されるとは思わない	48	29	60.4	15	31.3	4	8.3	
どちらかと言えば思わない	59	31	52.5	22	37.3	6	10.2	
どちらかと言えば思う	196	94	48.0	76	38.8	26	13.3	p=0.072
思う	95	36	37.9	45	47.4	14	14.7	
有効回答数	398							
世間から取り残されるとは思わない	141	79	56.0	43	30.5	19	13.5	
どちらかと言えば思わない	111	53	47.7	51	45.9	7	6.3	
どちらかと言えば思う	119	45	37.8	59	49.6	15	12.6	p=0.083
思う	21	10	47.6	5	23.8	6	28.6	
有効回答数	392							

表7　子どもを強く叱る時自分を別人のように感じると虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
まったくない	256	151	59.0	86	33.6	19	7.4	
まれにある	130	40	30.8	65	50.0	25	19.2	p<0.0001
よくある	12	1	8.3	6	50.0	5	41.7	
有効回答数	398	-	-	-	-	-	-	

表8 子どもが望み通りにならない・子どもとの相性と虐待傾向

		計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
		調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
子どもが望み通りにならない									
ない		18	13	72.2	4	22.2	1	5.6	
まれにある		265	143	54.0	96	36.2	26	9.8	
よくある		115	35	30.4	57	49.6	23	20.0	p<0.00001
有効回答数		398	−	−	−	−	−	−	
気の合わない子ども									
なし		276	133	48.2	113	40.9	30	10.9	
あり									
小計		29	8	27.6	14	48.3	7	24.1	
	第１子	23	6	26.1	10	43.5	7	30.4	p<0.05
	第２子	4	2	50.0	2	50.0	0	0.0	
	第３子	1	0	0.0	1	100.0	0	0.0	
	その他	1	0	0.0	1	100.0	0	0.0	
有効回答数		305	−	−	−	−	−	−	

表9　夫による子どもへの粗暴な扱い・夫への協力希望と虐待傾向

	計	虐待なし		虐待傾向		虐待あり		検定
	調査数	調査数	率	調査数	率	調査数	率	
夫が子どもを粗暴に扱うことはない	330	177	53.6	121	36.7	32	9.7	
まれにある	58	13	22.4	31	53.4	14	24.1	
よくある	7	1	14.3	5	71.4	1	14.3	p<0.001
有効回答数	395	−	−	−	−	−	−	
夫にもう少し家事・育児に協力して欲しいとまったく思わない	126	72	57.1	44	34.9	10	7.9	
まれに思う	184	89	48.4	73	39.7	22	12.0	
よく思う	85	29	34.1	40	47.1	16	18.8	p<0.05
有効回答数	395	−	−	−	−	−	−	

力を7割が望み，夫の協力・理解が不十分と答えた者ほど，また夫が子どもを粗暴に扱う者程，母親の虐待傾向も有意に高かった．虐待は夫との関係と深く関わっていると言えるであろう．記述では「女に負担ばかりかかる」「忙しい時・体調が悪い時・疲れている時に助けてくれる人がいない」等，身体的支援を求める訴えが多かった．また「夫が家事・育児に非協力的・無理解である」「育児の大変さを解ってほしい」「嫁姑関係・人間関係で悩む時に相談できない」「しつけについて意見が合わず悩む」等，育児や家庭生活についての精神的支援も望んでおり，「父親教室が必要」などの希望があった．「夫が母親である妻を理解し支援することで母性的機能を高め，母親が自己の母親としての技量を積極的に評価し，母性的行動をとることにつながる」[6] という考え方と今回の調査は関連していた．

今後は，夫が父親としての役割意識を持ち，主体的に母親支援と育児参加をする動機付けの保健事業を進めていくとともに，両親および家族全体の関係を留意しつつ母親を支援していくサービスの種類と量及び支援内容の質を整えていくことが重要である．

以下，児童虐待について (1)主観的母性観 (2)環境 (3)仕事に分けて述べる．

1）主観的母親観と虐待

(1) 主観的母親観；「子育てが負担，母親であることが嫌い，不適格，自分らしくない」など否定的回答が多い者ほど，「虐待傾向」「虐待あり」が有意に高かった．これは主観的母親観（ここでは母親である自分が好き，母親であることに満足している状態とする）と「虐待傾向」「虐待あり」に関連があり，今後の虐待予防は主観的母親観を高める支援が必要である．記述に「第1子が大変」．「3歳までが苦しい」．「心の成長に悩む」等があり，特に心の発達の変化に戸惑う様子が伺われた．逆に育児が楽しいと答えた者の記述では「保育所に入所することで余裕ができた」，「仕事を開始し育児以外の時間が持てた」など，育児の束縛の減少で，自由な時間ができたこと，友人や仲間ができて心に余裕ができたこと，をあげるものが多かった．今後公的機関・NPO活動などによる育児代行，心身の育児負担軽減，24時間育児からの解放，悩みを話すこと等によるストレスの解消等の支援が，主観的母親感を高め，育児を楽しむ支援につながると思われる．

(2) 出産前後の状態と母性意識；望まない妊娠・妊娠中管理が不十分・出産直後の保育器収容が「虐待傾向」「虐待あり」と関係していたことから，妊娠前からの心の準備が重要であることが示唆され，市町村保健行政と教育機関間で，妊娠に対する教育を連携して行うことが重要である．

(3) 虐待時の母親の状況；子どもを強く叱る時の母親は自分の状況を「別人のように感じる」が142人（35.5％）で，「虐待傾向」「虐待あり」が有意に高かった．「よく感じる」と答えた12人中11人が「虐待傾向」でうち5人が「虐待あり」だった．記述では，多くが育児や生活のストレスを感じると「叩いたり，暴言をはく」と訴えていた．そして一様に「行為の後で強い自己嫌悪と後悔にかられる」とし，「それにもかかわらず行為を繰り返してしまう」と訴え，更に「自分が怖くなる」「止まらない」「カーとなるとキレてしまいそう」と危機的な状況を訴えていた．また「夫や他の人がいれば冷静になれるのに，一人だと必要以上にたたいてしまう」「たたく前に感情をセーブするのは難しい」と訴えていた．このことは母親が育児等のストレスを誘因に，解っていても衝動的に虐待を繰り返し，母親として不適格という気持ちを強め，更に虐待するという悪循環に陥っていることが伺われる．今後は虐待する母親の心理的状態を正しくアセスメントして，「受容の態度で育児をすること」「子どもと共に親も人間としての成長する楽しさがあること」等の育児教育が大切である．

(4) 子どもとの関係；子どもが望み通りにならない・気の合わない子どもがいる者ほど有意に「虐待傾向」が高かった．記述で「子どもが大人の思うようにならないのは当然と解っていても，忙しい時や疲れている時，怒り過ぎる」との訴えが多かった．またマニュアルどおりにいかないと子どもを受容できず，苛立ってしまう傾向がみられ，母親に人間を理解する幅の狭さや親としての基礎ができていない様子が伺われた．将来の親になる中学・高校時代に，子どもを一人の人として尊重するという教育を，学校教育との連携の中で，見る・聞く・触れるという五感を通じて教育をし，体得させることが必要である．

2）母親の環境と虐待

各務原市と山県郡の町村で，虐待傾向に有意な差はみられなかった．世帯別，家族構成別，住居形態別でも虐待傾向に差がなかった．このことから，虐待は都会だけの問題ではないと言える．

40歳以上の母親13人に「虐待傾向」「虐待あり」が多かったが有意ではなかった．しかし，高齢出産はハイリスクの可能性を含んでおり，事例の検討が必要である．婚姻状況では通常の婚姻であっても，半数以上が「虐待傾向」「虐待あり」で，また配偶者の同居の有無による違いは見られず，通常の婚姻生活でも虐待は起こり得るといえる．少数例ではあったが離別では「虐待あり」が33.3％と高率であり，また未婚出産2人は，2例とも「虐待傾向」「虐待あり」で，離婚や未婚出産は個別性の高い支援対象となるであろう．記述で「よい母親であるか自信がない」「他の人がどんな子育てをしているか気になる」などがあり，母親同士のつながりを求めていることが伺えた．今後，地域で子育てグループ等の育成が望まれる．

3）母親の仕事と虐待

経済的状況では安定群に「虐待あり」が少ない傾向がみられたが，母親の就業の有無による関連はみられなかった．逆に専業主婦・パート勤務者に比べ，フルタイム勤務の母親の方が「虐待あり」が少ない傾向にあったことから，女性が自己実現のために就業を希望している場合は，仕事を持ちながらも育児がストレスになっていないと考えられる．一方記

述でフルタイム勤務者4人は「負い目を感じる」としていた．また，仕事を辞めた者の中には「再就職に不安」の悩みを持つ者が5人あり，仕事を中断せざるを得なかったことへの不満を訴えていた．

4　まとめ

保健所管内の乳幼児虐待発生予防対応を推進するため，虐待および育児不安の実態を把握することを目的として調査を実施した．対象は管内市町村（各務原市，高富町，伊自良村および美山町）で3歳児をもつ母親に，平成11年8月郵送法により，自記式・無記名で調査した．

結果；1）回収状況は対象者507人のうち442人（回収率87.2%）の回収で，回答に不備のある42人を除き，400人を解析対象とした．

2)「虐待あり」と判定された母親は12.5％,「虐待傾向」と判定された母親は39.5%であった．市部と郡部ではそれらの割合に差はなかった．

3）住居状況，家族構成別状況，婚姻形態，同居状況，母親の就業・専業別状況による差はなかった．

4）望まない妊娠，妊娠中の管理が不十分な者では虐待の傾向が有意に高かった．

5）育児不安が増すにつれて虐待の傾向が有意に高かった．

6）母親であることに否定的である者,「子育てを負担に感じる」とした者では虐待の傾向が有意に高かった．

7)「子どもを強く叱る時の自分を別人のように感じる」では,「感じる」頻度が高くなるほど虐待の傾向が有意に高かった．

8)「子どもが望み通りにならない,気の合わない子どもがいる」と感じている者程，虐待の傾向が有意に高かった．

9）夫が子どもを粗暴に扱う傾向にあるほど母親の虐待の傾向が有意に高かった．

また，母親が夫に「家事や育児をもっと協力して欲しい」というその気持ちが強い程，有意に虐待の傾向が高かった．

＜引用文献＞

1）　山田　和恵：今，お母さんが危ない！，大和書房，1993.
2）　財団法人　母子衛生研究会：改訂　子ども虐待，1999.
3）　日本弁護士連合会子どもの権利委員会：子どもの虐待防止・法的実務マニュアル，1998.
4）　内山絢子，小長井賀興；一般家庭調査：母親が行う虐待行為の実態，児童虐待とその対策，田賀出版，62-83，東京，1988.
5）　徳永雅子，大原美和子，萱間真美，吉村奏恵，三橋順子，妹尾栄一．首都圏一般人口における児童虐待の調査，厚生の指標．2000；（47）；3-10，厚生の指標，における児童虐待の調査報告書，1999.
6）　Marshall H.Klaus, John H.Kennell：親と子のきずな，医学書院，1985.